なにがし作「ひかぬ弓」（第貳明星第四号）の背景について

宮本正章

一

『明星』（明治三十五年四月一日、第二明星　第四号）に、「『ひかぬ弓』なにがし」と題する小文がある。なにがしと称する人物の再従妹への恋を吐露したものである。冒頭の部分を引用する。

男ありけり、彼は元来神経質なりし丈け熱き涙も血も、人並み劣らで花の朝、月の夕、さらぬ事にだに、その涙を灑ぎしこと屢々なりき、されど〳〵、そは誠に単純なる情より溢れし涙の余灑に過ぎざりき、斯くて彼は世の人の多く恋に心痛むる青春時代を、さる大人びたる誠の涙を知らで、否な幾度か婦女の危き誘惑ありしに拘らず、その機会を自ら捨てゝ人生の半ばまでは、実に誇るに足るべき、清き身と潔き心を持ちたりき、されど、彼も人の子なれば終に恋の比較的清きは、たま〳〵彼をしていよゝ煩悶に絶えざらしめき。

以下、原文をそのまま引用するのもわずらわしいので、この文の内容を叙述に沿って書き下す。

彼は数多い身内の中に、一人の優しい再従妹を持っていた。二人は幼馴染といった間柄ではなく、彼がまだ実社会に出ないおり、一度会ったことがあるが、その折は「余に斯かる可憐の再従妹ありしか」と思った程度で、西と東に百里の遠きを隔つる身となり、以後はときおりその人の俤をよび起す事があったに過ぎなかった。

彼が今日のような恋に悩む身になったのは、二年程前の春、彼女の父なる人と某所で出会い、その優れた人格に接したが、彼は先年父を失って傷心のおりから、その人の温い人柄がひとしおなつかしく思われて、そのような人を父として育った彼女はさぞや理想的な女性になっていることであろうと思うと、彼女への思慕の情がいつ

しか芽生えて来たのであった。しかし、彼女と直接的に文通する機会も持たなかったし、会うおりもなかった。

彼は年来の望みを達し、一店主となった。そうなると、苦楽を頒つべき妻の必要が起り、縁談が三つ四つ有ったが、幸か不幸か一つとしてまとまらなかった。その間、再従妹の家は火事に会い、父がなくなるという不幸が重なり、彼は彼女に慰めの手紙を送った。彼女は真情あふふる返書を寄せ、二人の間の文通は繁くなった。その間、彼の母はたまたま彼女に会い、その好印象をつぶさに彼に語り伝えたので、彼の恋情はますます燃え上っていった。彼は母より得た彼女の写真を書物に挾んで、ひそかに頬ずりせんばかりに眺めることが多かった。

彼は自分の意志を何度か彼女に伝えようとしたが、もし、この恋が実ったとしたら、双方の家事は非常な困難を招くであろう。彼と彼女は戸主であるから、民法上からは結婚なぞ絶対に許されることではない。親と家とに孝ならんとすると、たとえ一生の望みを捨てるとしても、断念せねばならなかった。しかし、人情の常として、そうなると、ますます思慕の情はいや増すのであった。

煩悶の情に耐え難くなった彼は、遂に最も心を許した友人にもらした。友人は百の障害を捨てて、その愛を遂げよと教えた。彼はそれは出来ないことだと言うと、世の中には、倫道を破ってでも恋を成就する人があるというのに、なんと心弱きことよ。家事上のことは、他に譏すべき方法もあろう。もし、よかったら、自分がその労をとってもよいとも言った。

友は重ねて、君は浮世の義理一片に束縛されて、而かも至極薄弱なる理由の下に拘泥して、生来初めて見出したりと自称する理想の情人を捨つるか、偽を以て充たされたる今の世の愚かなる一片の義理の為めに、満腔の愛の炎に自ら身を焼きて、死せば再び見る能はざる世に、綿々たる怨恨を永く〳〵徒らに残して墓に入るべき心か、而かも〳〵其切情を家親は愚か、その唯一の可憐の人にだに訴へで止まん心にや、さりとは怯懦も亦甚だしからずや。

と励ますのであった。

彼は余儀なき他の事情のために、百里の鉄路を上って、彼女と相会うこととなった。心中は苦痛と悦びにうちふるえていた。

敢て言ふ　彼はその可憐の人の容姿衆に絶せりとは、当初より思はざりき、只その人の性格が実にその理想に叶ひたるものと信じて、然る上の恋（？）なりき、相会ひて彼の所信は益々堅うなりぬ、実に彼はその理想を誤らざりき、彼は現世にて恐らくはその人を除いて、世に許すべき人なきを信じぬ、その人の一挙一動は、実にも全く彼が半身と信じたるに違はざりき

彼の情やいよゝ逼りぬ。

彼は彼女の家人と共に程近き城址に登った。無量の思いを胸にたたえて、しかし、その一端をもらすことさえもかなわずに、あらぬことを語りつつ歩んだのであった。彼女の家でもチャンスはあったが、一言もいえず千載の一遇を空しく逸してしまった。

汽車出でんとす、プラットホームに立ちて見送る可憐の人、然かも互に幾度か口頭まで逼りたる情を洩らす能はずして、今や将に一声の汽笛と共に東西遙かに相別れんとす、涙といふもの蓋しこの時を措いて、又何れの時にか灑ぐべき物ならん。

懐しき英吉利巻の紫のリボン、風なきに揺ぎぬ、汽車の窓より出でたる外套の袖、風を拒ぐ真似して幾度かその涙を拭ひしやらむ。

汽車は動きぬ、最早云ふに忍びざるは彼が哀れなる胸よ、実に此時にして彼が胸は正しく破れぬ、空気枕に乗せたる彼が頭は、八時間を経て、列車を下りしまで、再び擡げ能はざりき、只だ、胸逼る毎に、彼は絶え得ず、外套の袖を面に掩ひて泣き入りぬ、あはれ、彼が傷痍の医せられん事、うつし世にありやなしや。

以上が、「ひかぬ弓」の内容である。この文の作者、その境涯、『明星』掲載に至った経緯について、冒頭に与謝野鉄幹が次のように記している。それを引用し注釈を加えていこうと思う。

○　わが友某氏、少年にして郷を辞し、身を牙籌の競争場裡に投じて、悉さに辛酸を嘗むるもの、余年、空手遂に能く産を興して、婢奴を役する七八人、大都繁華の中央に家するに至る。

（以上原文）

鉄幹がわが友とよぶ某氏とは、小林政治（号天眠）のことである。小林天眠は姫路から五里余東北の山間の盆地、兵庫県加西郡北条町に明治十年（一八七七）七月二十七日に生まれ、二十二年に県立姫路中学校に入学するが、二十五年三月三年終了で病気のため退学、二十六年九月、叔父小野寺秀太の勧めで毛布商西村喜八商店に入り、丁稚奉公することになった。三十二年九月、西村商店廃業のため安土町心斎橋筋に毛布卸商を開店した。当時、毛布は舶来品であった。当初の雇人は西村商店時代の丁稚仲間の荒谷房太郎、北条町から連れて来た爺やさん、阿波の小松島から来た磯吉という少年の三人であったというが、おいおい雇人が増えて、三十五年当時は七人になっていた。

○　人と為り謹厳にして義気あり、一たび交る者その風を慕はざるもの無し。

天眠の性格については、彼の『よしあし草』以来の友人であった河井醉茗が「熱情的であるだけ一途に、思ひ込んだことは是が非で

も押し貫かうとする点があり、潔癖で、頑強で、自信を抂げない人であった。従って君の行動に対し慊焉たる人もあっただらうと推測するが、それだけ君は信頼するに足る人物であったと言へる。また君は誰に対しても親切で、神経が細かく働いてゆきとどいた心づかひには感動する。[1]」と記している。鉄幹、醉茗共に天眠観は一致していたと言えよう。

○　而して文学はその天資の嗜好に出で、毎夕家人を寝ねしめて後、燈を掲げ徐かに書を読むを常とす、而も之が為めに未だ家業を累すること無し。余暇述作する所の小説美文尠からず、文界新進の交遊皆その堪能に服す。

天眠は生来の文学好きで、西村商店に奉公していた折は、その店が毛布問屋であったから、春から夏へかけての半年間はほとんど閑散であったため、先輩や同僚に偏屈者扱いされながら、文学書に親しんだとある。また、「創作の原稿は半紙を四つ折にして膝の上に乗せ、街頭に面した店頭で手紙でも書くかの如く装ひ、真書き筆で細書した。二十四字詰三百行位のものなれば三枚に書き込めたもので、その当時には指先に筆タコが出来る位熱心であった。少し膏が乗って筆が順調に走る最中には、半夜燈の電燈がパッと消えると蠟燭を点じて書き続ける、着想が半途で頓挫した時は、折ふし雨の夜すがら濡れに濡れて中の島公園に、或は桜の宮へ迄も足をのばして逍遙し、想を練ったものだ[2]」と記している。

安土町で開店以後も、「店番の少閑を利用して懐中より小さな手帳を取り出し矢立の筆でこまごまと小説の原稿を書いていた[3]」というし、商用のための旅行では、「宿屋の部屋では文章を綴り、汽車汽船中にては読書に耽る事に由り慰安を求めてゐた。併し用務は決して怠らなかったと共に、名所見物などのために時間を偸むやうな事は決して仕なかった[4]」とある。

天眠の創作は『少年文集』や『文庫』や『万朝報』に発表されている。昭和十四年、小林商店の創業四十周年記念に旧作を蒐集して出版した『四十とせ前』には、「難破船」（少年文集第二巻第四号「地賞」　明治二十九年四月十日）をはじめとして、約二十編の名が見える。開店前後の作品を記すと、

○「迷ひ路」（よしあし草第十四号　明治三十二年五月二十五日）

○「あだまくら」（文庫第十四巻第二号　明治三十三年二月十五日）

○「二枚笈摺」（関西文学第一号　同年八月十日）

○「宮島曲」（新小説第五巻第十二号　第一位当選　二九五点　同年九月二十五日）

○「落花流水」（万朝報第二百三十二回第一等　明治三十四年七

月九日）

これら作品は悲惨小説ともいうべきもので、悲惨な境遇に呻吟する男女が描かれているが、そこにあるべき社会批判がみられず、底の浅い感をまぬがれない。しかし、日清戦争以後の文学の流れに敏感であったことを示しており、文学好きの一事業家の筆のすさびの域を越えたものであり、当時の大阪在住の投書家の水準をはるかにしのぐ実力を示している。彼に迫る実力の持ち主は、春雨中村吉蔵以外にはなかった。中村春雨は明治三十四年『大阪毎日新聞』の懸賞長編小説募集に、「無花果」を書いて当選して、一躍世に知られることになったが、投書家時代の作品などは、構成においては、天眠の方が巧みであると思われる。

○　然れども之に由って名を求むるは某氏の意にあらず、多年自ら資を出して文学の会を結び、機関雑誌をさへ出せりと雖、その功や一に之を他人に帰して毫末の誇る所なし、文芸鑑賞の志真にして謙譲の徳篤きに非ずんば、安ぞ如此くならむや。

天眠は、浪華青年文学会（後、関西青年文学会）の発足時からの同人で、明治三十年四月三日の難波の翁序での第一回会合には高須梅渓、中村春雨、山川延峯（伝之助）、河野清風（豊蔵）、小石青麟（孚治郎）等十七人の中に名を連ねている。この会の機関誌として『よしあし草』が三十年七月十八日に発刊され、明治三十三年六月、第二十六号で終刊になったが、廃刊の意志なき天眠は堀部靖文、中山梟庵らと協力して、『関西文学』として再出発させている。『関西文学』は三十四年二月の第六号で廃刊になるのだが、『関西文学』時代は、編輯発行者は山本栄次郎になっているとはいえ、天眠の安土町の店が編輯所になっているように、資金面編集面共に彼が会の中心であったと思われる。彼の『よしあし草』時代の功績は、明治三十年七月の中尾鶯夢起用から起った執行部内のゴタゴタを河井醉茗を招くことで切り抜けた折の、醉茗口説きおとしの使者をつとめたことである。発案は『文庫』詩人で文学会同人であった医学生の伊良子清白であったというが、編輯部に醉茗が入ることで、『よしあし草』詞藻欄は俄然清新の気のみなぎるものとなった。こうした実力者でありながら、天眠は、所謂、幹部役員に名を連ねなかった。醉茗が入ったおりも、編輯部のもう一人は、中村春雨であり、庶務部は山川延峯、小石青麟であり、会計部は堀部靖文、浅井渓水、奥村梅皐、中村琴風であった。[5] 商店経営者という多忙さがしからしめたこともあろうが、鉄幹の言うように、「謙譲の徳篤き」ことが理由であったろう。

○　左の『ひかぬ弓』一編文に仮托の体を作すと雖、是れ実に某氏が近日の心機一転より得たる、其皎潔なる人生唯一の苦悶を叙せるもの、未だ文藻の豊かなるもの有るにあらずと雖、嗚

呼幸なるかな某氏も亦天真なる情動の妙機に触着せる乎。生平の謹厚某氏の如く、人生の成功某氏の如く、文芸の渇仰某氏の如くにして、世初めて百合花の露の如き『初恋』のあまさを説く、可ならむ乎。余は切に之を某氏に乞ひて秘匿より得、以て我『明星』紙上に公にするを誇るもの也。

（与謝野鉄幹附記す）

天眠は男女関係には潔癖な人であった。先に掲げた小説類も「お恥しいが未だ異性を知らない時代の作品で、それで大膽にも男女関係や、花柳界の事などを可なり突込んで書いて居る。が其種を明かせば店の先輩に根掘り葉掘りして聞き質し、惣気交りの情話などを聞かせて貰ひ、それに想像を加へて書いたもので」[6]と述べている。その天眠が恋におちて煩悶の日々を送っている。刻苦して人生の成功者となった謹厳重厚の天眠に、人並みの熱い血潮をみて欣然たる鉄幹なのである。

天眠と与謝野鉄幹の交遊はいつから始まったか。

天眠自身の語るところでは、明治三十三年八月五日、安土町の書籍商組合事務での浪華青年文学会の例会に、「新派和歌に対する所見」と題する一時ばかりの講演をしたときという。『よしあし草』と対立していた金尾文渕堂の『ふた葉』、『小天地』に近づいていた鉄幹は、天眠達にはあまり好感は持たれず、場合によってはぶんなぐってやろうと梟庵などは言っていたという。しかし、〝虎の鉄幹〟が意外にも貴公子然たるスマートな紳士あったことなどから拍子抜けがし、喧嘩気分も解消し、新詩社に好意を持つに至ったとある。[7]

このおりのことをもう少し述べる。

八月七日、神戸山手倶楽部で神戸支会の文学講演会がもたれ、鉄幹の「新詩」に関する講演があり、天眠・梟庵も参加した。講演会果てて後、舞子行の車中で鉄幹出題の「汽車」という題で和歌を作ったが、「天眠子も和歌を作りしは大に奇」と梟庵は記している。[8]

天眠は「新詩社のパトロン」と言われた。天眠が『明星』満百号・終刊号（明治四十一年十一月）に「八年の久しき間匿名の下に毎月経費の不足を補はれたる」大阪の紳士として「感謝の辞」を捧げられていることは、よく知られている。彼の新詩社への経済支援は表面に表われた限り、『明星』第七号（明治三十三年十月）の出版費の内へとして寄附された三月が最も早い。ついで第十号（明治三十四年一月）の「新詩社基本金醵出第一回報告」の先頭に五円とみえる。到達順というから最も積極的な協力であろう。

以上が鉄幹の附記に加わえた注記である。

拙稿、「『天眠小林政治伝』の試み（一）」（『同志社国文学』第三十二号）を参照いただければ、注記に書いた点をもっと詳細に知っていただけると思う。

二

小林天眠の初恋の人である再従妹とは誰れであったか。「鉄幹の書簡―天眠の初恋」（『雲珠』9　昭和三十年九月一日）に「植田の一人娘U子」とある。植田雄子のことであり、後の天眠の妻となった人である。

「ひかぬ弓」では天眠がまだ実社会に出なかったおり一度雄子と会ったとあったが、右の「鉄幹の書簡」には、「植田の一人娘U子は天眠の再従妹で曽て明石小野寺家で一度会うた事があるが、五ケ年ぶりの再会であった」というから、その時点の明治三十四年から逆算すると、明治二十九年になる。天眠が西村喜八商店に奉公していたときである。そのときは自分にもこんなかわいらしい再従妹があったのかという程度で別れたと「ひかぬ弓」にはあった。

二人が会ったというのは、明石の小野寺家で天眠の母方の叔父小野寺秀太が医院を営んでおり、その父小野寺元安もやはり医師であった。天眠を将来は医者にしようと、十歳から地元の小学校に通わせ、兵庫県立姫路中学へ入れたのは、秀太叔父であり、病気のため中学を退学したとき、実業へ進むように勧めたのもこの叔父であった。[9] 天眠の母くには元安の二男四女のうちの第一子であり、北条町の小林達二郎に嫁して六人の子女を生んでいる。小野寺家は赤穂義士小野寺十内の末裔で、元安は六世孫という。他方小林家は先祖に油屋を営んだ大分限者を出し、その邸辺に油屋町の地名を残す程の旧家であった。しかし、明治時代は鉄道網から置き去りにされ町と共に、逼塞状態になっていた。父達二郎は明治二十八年八月三日に四十五歳で没した。[10] 天眠十八歳のおりである。

植田雄子は、浜松で旅館業を営む植田耕作とふさの一人娘であった。植田家は初代を彦八将教と称し、寛文二年（一六六二）に没したというから、古い家柄である。[11] ふさの母は小野寺家出身であったから、天眠の母くにとふさは従姉妹ということになる。植田雄子は明治十三年生まれであるから、[12] 天眠と三歳ちがいであった。

天眠が父達二郎をなくして傷心のおり、植田耕作に会って、その優れた人格に打たれ、この父の薫陶を受けた雄子はさだめし〝理想的女性〟であろうと思ったことが、恋のはじまりとあったが、天眠と耕作が会ったのは、明治三十一年か三十二年初頭であったろう。耕作は明治三十二年九月六日に没している。[13] 耕作没後、しばらくして火災にあって、打ち沈む雄子に天眠が慰めの手紙を書き、二人の文通が始まったのは「ひかぬ弓」で見たとおりである。

天眠が熱い想いを抱いて浜松駅におり立ったのは、明治三十四年十一月七日の早朝であったと思われる。

「鉄幹の書簡」[14] には、

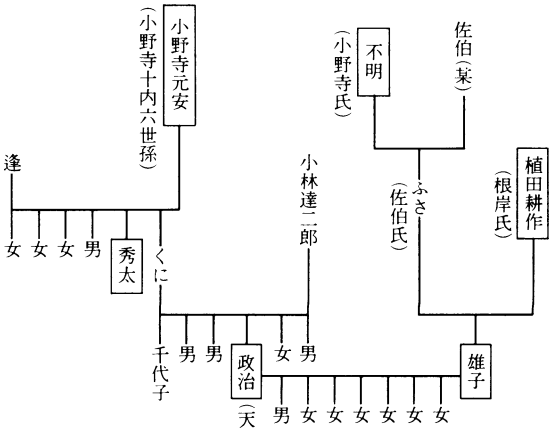
三十四年十一月四日　天眠がはじめて上京して渋谷に鉄幹夫妻を訪ふた時の皈途、浜松に下車して親戚植田家を訪うたが、その頃天眠は実妹C子が同家に寄寓してゐたので立ち寄ったのであった。植田家の女主人F子刀自は天眠の母の従妹で共に小野寺家の出身であった。

とある。一方、『明星』第十七号（明治三十四年十一月十五日）の「社告」には、

大阪の小林天眠君本月四日突然来京、纔か三日間の滞在中態々本社を訪はれたること二回、六日の夜帰阪せられたり。

とみえる。天眠はどのような用事で上京したのかわからない。鉄幹と新詩社を訪ねるのを主目的としたのか、植田雄子に会のが目的であったのか、私は雄子に会うための口実として、新詩社を訪問したのではなかったかと思う。一回目の訪問は四日であったのだろう。この日は、鉄幹は『明星』校正のために留守、二回目は会えたらしい。当時の新詩社の所在地は、東京都豊多摩郡渋谷村字中渋谷三百八十二番地、この年六月十日か六日か十六日に上京した晶子が寄留していた。[15] 当時の鉄幹たちは貧窮の極みにあって、天眠にお茶を出そうにも茶を買うこともできず、粉になった茶を縫った袋に入れて差し出す有様であった。[16] 六日に新詩社を訪ね、その夜に東京を発ち、七日に植田家を訪ね、雄子に会ったのである。城址散策のおりも、家でも自分の意志を伝えられなかったのは、「ひかぬ弓」でみたとおりである。

左の系譜は天眠の孫池田真理子氏の御教示にもとづいて作成した略図である。当時、植田家へ寄留していたのは、末妹の千代子であったらしい。ちなみに天眠の母くには久仁子、雄子はゆうと書かれ



（□は「ひかぬ弓」と関係深い人々）

ることもある。

池田氏に雄子の印象を聞くと、大変もの静かな人であったと言われ、書をよくし、天眠が昭和十九年に出版した『毛布五十年』の題字は雄子の筆になるという。雄子は昭和三十年十一月二十二日に七十六歳でなくなったが、寄せられた弔電に、天眠の『よしあし草』時代の友人本山荻舟の「白菊ののぼりてほしとかをるべし」[17]というのがある。白菊を思わせる気品のある美しい人であったのであろう。

さて、帰阪した天眠は「母に密かに胸中を打明けて相談したが、既にみたように、天眠も戸主、雄子も女戸主であったから、民法上結婚は困難であった。旧民法は、「戸主権を有する者は、家族を統轄し扶養する義務を負う」[18]と規定していたからである。

叔父の小野寺秀太は、天眠の親がわりをつとめているほどの人であった上に、彼自身が若い時同様の苦悩を体験していたので、大いに同情し、「苦情の根元を覆へすべく随分努力して呉れたが徒労であった」[19]という。

その最大の原因は、小野寺元安という頑迷この上ない外祖父がどうしても天眠・雄子の結婚を承諾しなかったからであった。天眠は元安から特別に愛されていると思い込んでいたから、意外に思った。それには理由があった。天眠が生後一年未満のとき、老人が晩酌中に何か意に満たぬ事があり、突如投げつけた酒盃が天眠の額にあたってパクリと口をあけ、出血したのに驚いて幾針か縫いつけたことがあった。後年、その疵あとを見るたびに老人は自ら反省したのか、特別な愛情を示していたのである。それを天眠は「己れのみ特に愛して呉れる解してゐた」[20]訳であった。

元安老の反対には、周囲の人々もどうにも手が付けられなかった。天眠は非常に悲観して悶々の極地に陥っていたが、思い切って鉄幹に相談し、その後、鉄幹は天眠を励ます書簡を寄せた。[21]その手紙は「鉄幹の書簡」に引用され、『天眠文庫蔵　与謝野寛　晶子書簡集』（植田安也子　逸見久美編）に収録されている。[22]

○

その夜の御ものがたりまことによく小生へお打あけ被下候御志ありがたく感激致居候その後の御成りゆき窃かに御洩し被下度候、大丈夫、俗物同様に朽ち候ならば　世の毀誉を気にして心ならぬ一生を淋しく送るの要も有之候へども学問にもあらず儀式にもあらぬ人間の至情に係る問題に就てはお互に別に偽るの要なく之を忍ぶの要無之候　五十年と申候ても誠に電光石火也百年の栄華ハ迚も企てがたく候に何故にその天真の性情を偽りて冷寂なる生活を送るべきや我兄の非凡なる人となりより見て決してこの「情」の上の苦闘に御捷ち被成〔遊〕候事の出来べしと信申候　躊躇する勿れ　人は見す〳〵鬢に雪を見るべし

あたら青春妙齢の恋人を大兄の為めに空しく老いしむべけむや能く〳〵宮本兄と御協議も必要に候へども情はもと内より発す決して他人の指図に従ふ事　彼の道徳倫理の如き無味乾燥せるものに非ず　自ら燃ゆる二人者の情火あゝ誰か之を咎め制し得べきとするぞ

小生は大兄の幸福を祈る外何も申すの要なしと存候　御勇断の挙に出でられ度候や

一月十一日夜

天眠大兄　必御直披

（『与謝野寛　晶子書簡集』所収）

明治三十五年一月十一日の夜に執筆されたこの手紙は、この年一月二日に大阪北区北野の朝妻楼で開かれた「関西文学同好者新年大会」に西下した鉄幹に天眠が自分の煩悶を語り助言をあおいだことに対する回答であり、励ましであると思われる。「その夜の御ものがたり」のその夜がいつか、二日の新年大会の果ててての後、北浜の鉄幹の宿で打ちあけたのか、三日の文楽座の観劇後に語ったのかは不明だが、自分の恋の絶望的状況を縷々と訴えたのであろう。それから約一週間後、何の進展もない様子に、右の書簡の執筆となったのであると思われる。恋愛至上主義の『明星』派の総帥としての鉄幹の主張があますところなく表現されているといえよう。こうした精神の高揚は二日後に晶子と木村鷹太郎の媒酌により結婚式をあげることになっていたことと関係があると思われる。

文中の「宮本兄」とは、天眠の旧友宮本富士一（号此君庵）で、彼は天眠の信頼厚い人であったのであろう。後年、天眠が天佑社という出版社を興したとき、福井県三国税務署長の職を捨てて、天眠の事業を援けている。[23]「ひかぬ弓」の天眠を励ます友人は、この此君庵であった。

天眠は「鉄幹より熱情の籠った斯の書簡に接し大いに意を強うした。止むなき場合は地久戦を取るべく決意して、周囲の人々より持ち込まるゝ数々の縁談をば皆回避して不得要領たらしめてゐた[24]」と書いている。

さて、「ひかぬ弓」はいつ書かれたものか。天眠自身の説明では、「天眠は既に述べた如く歌をやらなかったため『明星』にも寄稿しなかったが、ただ一編だけ匿名で載せてゐる、夫れは天眠が初恋に敗れんとして苦悶を続けてゐたとき、その苦悩の一端を洩らした一篇の随筆であるが、夫れを鉄幹が強いて明星に載せたのである[25]」と。「ひかぬ弓」内容から見れば、浜松で雄子と会って帰阪した直後に書かれたものと考えたい。その随筆の存在を知った鉄幹が強請して貰い受けたのがいつであったかわからない。「ひかぬ弓」の掲載された『明星』（第二明星第四号）は四月一日発行であるが、その締

切は遅くとも三月十日頃であろうから、最下限をこのあたりと見て、上限は鉄幹の手紙の書かれた後、一月下旬とするのである。

天眠の結婚問題は急転直下解決をみた。それは彼と雄子の結婚に反対しつづけていた元安老人が明治三十四年十二月七十七歳で他界したからである。数旬の病いであったという。最大のネックのとり除かれた天眠は結婚を急いだ。親戚も天眠の希望を入れて明治三十五年四月六日に華燭の典が挙げられた。[26]『明星』の発兌に遅れること五日にして、天眠の初恋は成就したのであった。「ひかぬ弓」の文は、結婚の喜びを天眠・雄子夫妻に改めて嚙みしめさせることとなったと思われる。

天眠・雄子夫妻は幸福な家庭をきづき、一男六女を得た。植田家は長女に継がせたという。[27]

既にみたように、妻雄子は昭和三十年十一月二十二日に永眠した。享年七十六歳であった。[28]ついで、天眠が昭和三十一年九月十六日に没した。享年八十歳であった。[29]

「ひかぬ弓」は匿名で発表された。それをわが初恋を語るものとして、署名入りで再び活字にしたのは、昭和三十年九月の『雲珠』（第三巻第九号）誌上であった。実に五十三年の歳月が流れていた。宿痾に悩む老妻との別れの近いことを予期して、その若き日の恋の軌跡を発表しようと思ったのではなかったか。

注

① 「熱情の人」『雲珠』第四巻十一合併号　昭和三十一年十二月一日　雲珠短歌社。
② 『四十とせ前』小林政治　昭和十四年九月六日　非売品。
③ 「小林天眠を悼む」増谷沙水①の書。
④ 『毛布五十年』山賊の住む九州国見山越え　小林政治　昭和十九年六月　非売品。
⑤ 醉茗が浪華青年文学会の中枢に入ったのは、明治三十一年十二月一日からであった。『よしあし草』第二巻第拾号「本会報告」にみえる。
⑥ ②に同じ。
⑦ 『毛布五十年』故与謝野寛を懐ふ。
⑧ 『関西文学』第弐号　消息　某手記とあるが、中山梟庵の筆になると思われる。
⑨ 『毛布五十年』大阪安土町に開業。
⑩ 『毛布五十年』古井戸、その他。
⑪ 天眠の孫　池田真理子氏の御教示。
⑫ 『天眠文庫蔵　与謝野鉄寛　晶子書簡集』植田安也子　逸見久美編　昭和五十八年六月七日　八木書店。
⑬ ⑪に同じ。
⑭ 「鉄幹の書簡（五十四年前の）天眠の初恋」『雲珠』第三巻第九号。
⑮ 「十日説―晶子の『短歌三百講』、六日説―『明治の青春』中の婆やの言　十四日説―滝野あて六月十六日付鉄幹書簡」「与謝野鉄幹・晶子年譜」にみえる。『評伝与謝野鉄幹晶子』逸見久美　八木書店　昭和五十年四月十日。
⑯ 「冬栢院、白桜院、追悼座談会」における小林政治の発言『毛布五十年』。

⑰「雲珠消息」

また逢はむとておどりあひてわかれけりその夜ゆきます君ともしらで　宮崎白蓮

御なさけははらからよりもこまやかにわが師の君もおぼしてしひと　中原綾子

の歌もみえる。『雲珠』第四巻一月号。

⑱『広辞苑』戸主権の説明　岩波書店　昭和三十九年八月一日。

⑲ ⑭に同じ。

⑳㉑ ⑭に同じ。

㉒ 他に「与謝野寛書簡抄（五）―冬栢六巻九号（昭10・9・28）43頁掲載」、『与謝野寛　晶子書簡集』注。

㉓「晶子の書簡（未発表）その一　天佑社営業後」小林天眠『雲珠』第四巻八月号。

㉔㉕㉖ ⑭に同じ。

㉗『毛布五十年』娘の英国留学。

㉘ ⑰に同じ。

㉙「天眠老略歴」①の書。

第三十五号　要目（一九九一年三月刊）

故安永武人先生追悼号

安永武人先生を悼む……玉井敬之（一）
安永武人先生御経歴・著作目録……（四）
〔遺稿〕天皇・戦争・国民……安永武人（一五）
――戦時下・短歌にみる十五年戦争の位相――
明治の「青春」……玉村文郎（五九）
――語の活性化と分化――
『よしあし草』の俳句欄……宮本正章（六六）
石川啄木の「渋民日記」と「林中日記」……河野仁昭（八一）
「いたづら小僧日記」の原書……堀部功夫（九二）
「大謀反者」と大逆事件……内田　満（一〇四）
――一九一〇年、有島武郎の二つの暗欝――
久野豊彦の文学理論……小川直美（一二五）
――その社会性をめぐって――
丹羽文雄「鮎」論……田中励儀（一三八）
――〈生母もの〉の虚構性――
『汽車の罐焚』論ノート……岸　健治（一三九）
伊藤整「街と村」論……上田　正（一五一）
――女性の幽鬼たちについて――
佐多稲子「四季の車」覚え書……北川秋雄（一六一）
――中野鈴子のことなど――
阿部知二における小説の方法・試論……水上　勲（一七四）
――戦後小説の視点人物をめぐって――